

日本の詩歌

10

高村光太郎

中央公論社

高村光太郎

昭和42年11月15日初版発行

昭和45年6月1日4版発行

発行者 山 越 豊

本文製版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

道程

5

道程以後

94

猛獸篇

144

猛獸篇時代

163

造型篇

213

独居自炊

244

智恵子抄

268

典型

337

詩人の肖像

山本健吉

鑑賞

伊藤信吉

年譜

カット
(紙絵)

高村智恵子

高村光太郎

道 程

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり

かの不思議なる微笑^{ほほえみ}に銀の如き顫音^{せんおん}を加へて

「よき人になれかし」と

とほく、はかなく、かなしげに

また、凱旋^{がいせん}の將軍の夫人が偷視^{ぬすみみ}の如き

冷か^{ひやや}にしてあたたかなる

銀の如き顫音を加へて

しづやかに、つつましやかに

モナ・リザは歩み去れり



『道程』は大正三年十月出版された。高村光太郎の第一詩集である。序文、跋文等はいっさいない。収録作品七十六篇だが、「泥七宝」の短章を一篇ずつに数えたと総計百七篇になる。作品は明治四十四年一月から、大正三年十月にかけて各種の雑誌に発表したものから選び、それを年次順に配列してある。装幀内藤銀策。自費出版だった。

本巻の『道程』篇には詩集から代表的作品三十篇を収録（「泥七宝」を各一篇ずつに数えれば四十一篇）、これに『道程』時代の作品三篇を付加した。「失走」以下の分がそれである。

モナ・リザは歩み去れり

深く被^{おほ}はれたる煤色^{すすいろ}の仮漆^{えん}こそ

はれやかに解かれたれ

ながく画堂の壁に閉ぢられたる

顔ぶちこそは除かれたれ

敬虔^{けいけん}の涙をたたへて

画布^{トワール}にむかひたる

迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ

ああ、画家こそははかなけれ

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

心弱く、痛ましけれど

手に権謀の力つよき

昼みれば淡緑に

「失はれたるモナ・リザ」を『道程』に入れた時、詩の終りに「わが愛せし某様の女を我仮にモナ・リザと名づけたりき」という付記があった。

この付記からも推察できるように、この詩は長沼智恵子（『智恵子抄』参照）とのかかわり以前における高村光太郎の恋愛詩で、それも愛するものとの別れの詩である。もつと厳密に言えば「モナ・リザ」という愛称で呼ぶほど強く心をひかれていた女性か、どこかへ去って行くことの寂寥^{さくろう}を述べた詩である。しかし、その寂寥感の表現には穏やかな落着きがあり、「歩み去るその後かげの慕^もはしさよ」と、むしろ愛慕もしくは哀慕ともいうべき情緒を綴っている。

詩に表現された情緒はそんなふうに穏やかで、乱れない美しい

夜みれば真紅^{しんく}なる

かのアレキサンドルの青玉^{せいぎよく}の如き

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

我が魂を脅し

我が生の燃焼に油をそそぎし

モナ・リザの唇^{くちびる}はなほ微笑せり

ねたましきかな

モナ・リザは涙をながさず

ただ東洋の真珠の如き

うるみある淡碧^{うすあわ}の歯をみせて微笑せり

額ぶちを離れたる

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

抒情詩の形をとっているけれども、その女性との実際の往来はもっと激しく、燃えるような情熱をそそいだ。それは吉原の河内楼にいた「若太夫」という人で、仮りにも「モナ・リザ」と呼んだのだから、その著名な絵の女性をしのばせる美貌であつたのだらう。

「若太夫がいなくなってしまうと身辺大いに落莫寂寥で、私の詩集『道程』の中にある『失はれたるモナ・リザ』が実感だった。モナ・リザはつまり若太夫のことで、詩を読んでくれば、当時の心境がわかってくれるはずである」

〔ヒウザン会とパンの会〕

ここに高村光太郎の青春の一つの姿がある。その女性は「我が生の燃焼に油をそそぎし」人だったのである。そんなにも情熱を燃え立たせてくれた人だったのである。

かつてその不可思議に心をののき
逃亡を企てし我なれど

ああ、あやしきかな

歩み去るその後かげの慕はしさよ

幻まぼろしの如く、又阿片を燐やけりく烟けりの如く

消えなば、いかに悲しからむ

ああ、記念すべき霜月の末の日よ

モナ・リザは歩み去れり

生けるもの

何事も戯たはわれにして、何事も戯ならず

戯ならずと言はむにはあまりに幼し

戯なりと言はば自ら悲し

我も生けるものなり

* モナ・リザ　フィレンツェのジョコンド夫人を描いたレオナルド・ダ・ヴィンチの名画。

* 仮漆　油絵などの画面を保護するために塗るニス。

* アレキサンドルの青玉　金緑石の一種で青緑色を呈するが、灯にすかすと赤紫色に見える宝石。

精神を支える何かがくずおれてしまったかのような、生の足場がどこかへ陥没してしまっただかのような、生活のいっさいが悲哀に濡れている時。私どもの生活には、そういう悲哀の襲ってくることもある。この詩を作った時、高村光太郎は何かの挫折を体験した。これを次の「根付の国」と対照してみると、その挫折や悲哀の何であるかが分ってくる……。

公園に散る新聞紙の如く

貧^{まつし}く、あぢきなく、たよりなく

雨にうたるまで

生けるものをして望むがままに生かしめよ

根付の国

頬骨^{ほほほね}が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫^ほつた根付^{ねつけ}

の様な顔をして

魂をぬかれた様にぼかんとして

自分を知らない、こせこせした

命のやすい

見栄坊な

小さく固まつて、納まり返つた

猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だぼはぜの様な、麦魚^{めだか}

「根付の国」は、ももんがが、だぼはぜ、めだかその他のガラクタを並べ、その形容で日本人を痛罵した詩である。日本人の顔がそれらに似ているというよりも、日本人の生活意識に巣くう古臭い習俗や義理人情など、いつさいの卑俗なものをあばき立てたのである。

この詩を雑誌に発表した時、「こんなのは詩ではない」と非難されたというが、それはこの詩が、従来 of 詩の概念や美意識をくつがえし、感情や思考をむき出しのまま投げつけたからである。卑小な世俗をあばき立てることによって、心理的ショックを与えたからである。この詩で作者は、固定的な詩の概念に対する抵抗と、人間喪失の生活慣習に対する抵抗と、その二重の抵抗を爆發させた。

の様な、鬼瓦おにがわらの様な、茶碗のかけらの様な日本人

画室の夜

暖炉ストーブの火は消えて

室の四すみよりいつとなく

寒さは電流の如く忍び入る

絹マントルの明るき光は瞬またたきもせず

物の色より黄を奪へり

乱雑なる画室の様のもの淋さびしさよ

今もわが頭の中に微笑せる彼かの人を思へば

絵具と画布とは児戯に近し

——芸術は唯巧ただ妙なる約束の因襲なるを——

むしろシャヴヌの画を嗤わらつて

一杯リキウルの酒に泣かむとす

* 根付 印籠いんろう、煙草たばこ入れなど袋物の緒の根元につけ、帯などに下げるのに用いる小工芸品。木彫、牙彫などの精巧なものがある。

* 名人三五郎 怪奇な人物などを好んで形どって作った江戸中期の根付彫刻の名匠吉村周山と同一人物かと思われる。

ストーブの火も消えた冬の画室（アトリエ）の夜。午前二時の寒さは、室内のすべての器物を凍らせるかのようだが、しかし室の一隅の椅子に倚る人は、その胸に消えることのない炎を燃やしている。それは「今もわが頭の中に微笑せる彼の人を思へば」という情炎の火だ。その「彼の人」は、「失はれたるモナ・リザ」の女性かもしれない。

寒さ烈し

冬の夜の午前二時

食後の酒

青白き瓦斯の光に輝きて

吾がベネチクチンの静物画は
忘れられたる如く壁に懸れり

食器棚の鏡にはさまざまの酒の色と

さまざまの客の姿と

さまざまの食器とうつれり

流し来る月琴の調は

幼くしてしかも悲し

「食後の酒」も青春の情炎から生れた詩である。そこに「マドモワゼル・ウメ」と愛称した女性が浮んでくる。

ランプからガス燈へ、次いで電燈へという燈火の変遷は、明治文化の一つの象徴だった。その青白いガス燈の光の漂う室——それはカフェカレストランかの一隅だが、そこで黙しがちに酌む洋酒の辛い舌触り。その辛い刺激が酔いに誘うのに、しかし心は冷たく醒めて

いる。
酔いのむなしさ。そのむなしさを知る放埒の傷み。放埒の傷みによって自分を慰める青春の情炎。それは街の通りを流れる月琴の音色さえ、そこはかとなく悲哀をそそる都会の夜である。

* ベネチクチンの静物画 ベネチクチンは洋酒の名。その瓶を描いた絵のことと思われる。

かすかに胡弓こきうのひびきさへす

わが顔は熱し、吾が心は冷ゆ

辛き酒を再びわれにすすむる

マドモワゼル・ウメの瞳のふかさ

寂寥

赤き辞典に

葬列の歩調あり

火の気なき暖炉ストーブは

鉦山かねやまにひびく杜鵑とけんの声に耳かたむけ

力士小野川の嗟嘆さたんは

よごれたる絨毯じゅうたんの花模様はなもようにひそめり

「マドモワゼル・ウメ」について、
高村光太郎は次のように回想して
いる。

「雷門かみどの『よか楼』にお梅さん
という女給がいた。それほど美
人というんじゃないのだが、一種
の魅力があつた。私は昼間つから
酒に酔い痴れては、ボオドレエルの
『アシッシェの詩』などを翻訳
口述してマドモワゼル・ウメに書
き取らせ、『スバル』（注・雑誌）
なんかに出した」（『ヒウザン会と
パンの会』）

「寂寥」の主点は「何処にか走ら
ざるべからず」「何事か為さざる
べからず」というところにある。
しかしその激しい衝迫は、すぐさ
ま「走るべき処なし」「為すべき
事なし」といういら立たしさにな
ってはね返ってくる。

何者か来り

窓のすり硝子に、ひたひたと

燐をそそぐ、ひたひたと――

黄昏はこの時赤きインキを過ち流せり

何処にか走らざるべからず

走るべき処なし

何事か為さざるべからず

為すべき事なし

坐するに堪へず

脅迫は大地に満てり

いつしか我は白のフランネルに身を捲き

蒸風呂より出でたる困憊を心にいだいて

しきりに電磁学の原理を夢む

何という焦燥だろう。全篇が昏迷とその痛苦に発する精神のうめきに満ちている。これはその当時の高村光太郎の内面生活をさながらに語るものであった。

「赤き辞典に／葬列の歩調あり」とは何だろう。部厚い辞典に、過去の死語がいっぱい詰っているということである。「力士小野川の嗟嘆」とは何だろう。力に満ちたものの心情のくずれを、比喩的に表現した言葉である。「黄昏はこの時赤きインキを過ち流せり」は、不気味に焼けたたれた夕焼けの色の形容であり、作者の心情の表現であった。「鶴音水は封筒に黙し」は、密封されて発散されぬ心情の比喩である。

このようにこの詩には比喩や形容が次々に出てくる。それを通して、作者の心情や精神の惑乱が語られている。従ってこの詩は、方法論的に象徴詩に属するものと言

朱肉は塵埃に白けて

今日の仏滅の黒星を嗤ひ

晴雨計は今大擾乱を起しつつ

月は重量を失ひて海に浮べり

鶴香水は封筒に黙し

何処よりもなく、折檻に泣く

お酌の悲鳴きこゆ

ああ、走る可き道を教へよ

為すべき事を知らしめよ

氷河の底は火の如くに痛し

痛し、痛し

つてよく、「失はれたるモナ・リザ」などと並んで、表現上に著しい特色のある作品だった。「暖炉は／鉦山にひびく杜鵑の声に耳かたむけ」「月は重量を失ひて海に浮べり」なども、すべてその象徴的表現に属するものである。

昏迷と焦燥。「氷河の底は火の如くに痛し／痛し、痛し」という終りの言葉には、苦悩の足踏みがいかにも切実に響いている。

* 力士小野川 第二代横綱小野川

喜三郎。当時、無敵を誇っていた

谷風を破って名声をあげた。

* 仏滅 陰陽道で凶に当る悪日。

黒星は凶・貞を意味する。